

長崎医学伝習の再検討

沼倉延幸

安政四年（一八五七）に開設された長崎医学伝習は、当時最新かつ最高水準の西洋医学教育機関として、洋学史上、医学史上の一大画期となった。初代教官ボンベ・ファン・メルデルフォールトが施した伝習期間（文久二年、一八六二）に絞ってみれば、彼の回顧録『日本滞在見聞記』と伝習生松本良順の『蘭疇自伝』等を基本史料とした研究文献の蓄積がある。しかしながら、あらためてこれらを検討してみると、従来諸書に述べられてきた点と事実関係とを確認する必要に気付く。

一月例会において筆者は、①松本良順の長崎在学期間、②長崎養生所の設立過程における長崎奉行の施策、③長崎養生所開院日の確定（文久元年九月三日）、④医学伝習生の全体的傾向、⑤長崎養生所における医療状況、を中心として再検討の結果を報告し、あわせて従来の研究文献の誤認部分も訂正してみた。ここでは紙幅の都合もあり、⑤について概略を紹介するに留めたい。

ボンベは、長崎養生所開院後一年間の入院治療患者数が九三〇名、このうち回復した者七四〇名等の数値を掲げ、肺病・気管支疾患・心臓病・眼疾等の症例が多いと判断している。しかるに、その実際の診療状況について意外と検討されていないのが実情である。そこで、伝習生関寛斎の『長崎在学日記』に付された「朋百氏治療記事」と、順天堂大学山崎文庫所蔵の『長崎病院配剤

録』『朋氏備忘録』所収の「朋氏吉利仁幾」の三史料から、開院当時より文久二年即ちポードインの来日初期の診療まで、つまり開院後一年余の診断状況を試算してみた。ここに見える診療患者数は重複を除くと九八名（内女性七名）であり、当該期の入院患者数の概して一割に相当する。以下にその数量的傾向を掲げておく。

(1) 年齢層——年齢の判明する六九名中、二十歳代三五名（五一％）、三十歳代一九名（二八％）と働き手中心であった。年少・高齢者がここに見られず、三史料を残した伝習生が担当した患者の年齢層がここに集中したものと見られる。

(2) 出身地——判断可能な七二名中、長崎二三名（三二％）を含む肥前三一名（四三％）、九州全体で五四名（七五％）の他、外国・四国地方四名（六％）、外国人一四名（一九％）。長崎市内外と外国人に対する医療等、長崎養生所の設立目的を満たしている。

(3) 身分・職——この項目の記載が限られているが、各層から広く集まったことが窺え、咸臨丸乗組員や丸山遊女等も見られる。

(4) 病症例——梅毒等の性病が三分の一を占め、ボンベが検梅制度の普及を訴えた所以と言える。病症例の多少はともかく、消化器・呼吸器・循環器系の内科疾患、外科、皮膚科、眼科、神経科、泌尿器科等の多様な例を見ると、長崎養生所がまさに西洋式総合病院の機能を果たし、臨床講義等の教育面の意義も高かったことがわかる。

さらにかかる史料を蒐集し、長崎医学伝習に関する諸問題の把握に努めたいが、医学伝習が長崎養生所の設立により、質実共に一層多彩かつ本格化・組織化したことが判然とした。

尚、(1)~(4)については、既発表の拙稿「長崎養生所の設立をめぐる長崎奉行の施策と幕府評議——幕末期改革派官僚岡部長常の洋学導入——」(『青山学院大学文学部紀要』二八号)及び同「長崎医学伝習と関寛斎——『長崎在学日記』を中心に——」(『洋学史研究』二号)の他、稿を改めて論じてみたい。

第26回医学史研究会

日本医史学会関西支部(昭和61年秋季)

合同総会

とき 第一日 昭和六一年一月一日(土) 午後一時

第二日 昭和六一年一月一日(日) 午前九時三〇分

ところ 大阪市北区中之島四丁目 大阪大学医学部 二階会議室

プログラム

〈第一日〉

I 要望課題…戦後の医学・医療(一九四五~一九六〇年)

一、総論……………松田 武(阪大・医)

二、医学教育の戦後史……………中川 米造(阪大・医)

三、戦後の薬事情……………宗田 一(京都市)

四、戦後の大阪北河内地区の病院史(一)……………小松 良夫(寝屋川市小松病院)

五、敗戦直後の日本産業衛生協会(学会)の再出発……………三浦 豊彦(労働科学研究所)

六、戦後(一九四五~一九六〇年)沖繩の医療……………照屋 寛善(琉球大名誉教授)

七、戦後医療技術の第一次革新……………上林 茂暢(東京柳原病院)

八、朝鮮戦争に召集された日赤看護婦……………看護史研究会

九、国立病院付属看護学校の発足と教育内容について……………遠藤恵美子(東京都立医療技術短大)

一〇、戦後医療史の出発点……………若月俊一先生の場合……………川上 武(東京柳原病院)

一一、近代麻酔学のなりたち……………稲本 晃(京大名誉教授)